

「子育て広場特論」を通しての学生の学びと課題

佐久間 路子 (発達臨床学科)・瀧口 優 (短期大学保育科)
草野 篤子 (家族・地域支援学科)・小松 歩 (短期大学保育科)

1. 問題と目的

少子高齢化問題が国の大きな課題となり、「子育て支援・保護者支援」が保育現場でも重要な活動となっている。保育者養成校における学生にとっての「子育て支援」については、「知識としてのデスクワークばかりで、しかも独立した科目として設定されていないため、「子育て支援」の全容と実践に必要な対応の仕方が講義・教授されていない」(池田, 2006)といった問題提起もなされており、「子育て支援」にかかわる力量の育成を目的としたさまざまな取り組みが行われている。例えば、附属幼稚園未就園児の会へ参加し観察を通して学ぶとともに、親子のふれあい遊びや手遊び絵本など一部を担当するもの(高橋・岡, 2008)、学外の多様な子育て支援の現場を見学参加し、その後継続参加して活動の一部を体験するもの(馬見塚他, 2009, 2010; 土居, 2011)、多様な子育て支援の場に学生がボランティアとして参加するもの(池田, 2006)などである。

本学では、2006年に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」(以下「特色GP」)に「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育一学内7種の広場の連携をもとに、学生が企画する地域との交流を通して」が採択され、学内の複数の子育て広場の実践だけでなく、2007年度より授業科目として「子育て広場特論」を設置し、今年度で6年目に当たる。本授業は、子育て支援や地域支援に関する知識を学ぶとともに、学生自身が広場を「企画運営」することに特徴がある。広場の実践によってさまざまな人とのコミュニケーション力を高め、広場の企画運営を通して考える力や判断する力、そして表現する力、更には総括する力を身につけることを目的としている。ま

た、子育て広場に参加した学生や「子育て広場特論」を受講した先輩学生が「GP学生委員会」として、本授業でもアドバイザーとして参加している点も特徴と言える。なおGP学生委員会の学生の成長については「白梅学園大学・短期大学教育・福祉研究センター年報NO.11」(瀧口・瀧口, 2006)、「日本保育学会第61回大会発表論文集」(小松他, 2008)、「日本保育学会第62回大会発表論文集」(瀧口・金田, 2009)、「地域と子ども学第3号」(瀧口, 2010)においてまとめてあるので参照されたい。

このように「子育て広場特論」は、講義+実践という授業形式であること、また単なる観察や一部参加だけではなく、学生が中心となって広場を企画運営することを通じて、学生の「子育て支援」の力量を高めることを目指しているという点で、これまでの大学教育にはない画期的な授業実践といえるだろう。本研究では「子育て広場特論」という授業の効果を明らかにするために、2010年度15回目の授業後に実施したアンケート(受講生29名)の内容を分析し、上記の授業目的に挙げた力量について、どのように変化成長しているのかを検討する。

2. 2010年度「子育て広場特論」の授業内容と経過

2007年度から3年間積み上げてきた「子育て広場特論」は、担当教員数を徐々にしぼり、4人で実施することになった。授業のねらいを「特色GPの子育て広場の主旨に則り、7つの広場を視野に入れて学生の指導を行い、学生自らが企画し実施する広場の運営をすすめる」とし、前・後期各1回、子育て広場(あそぼうかい・世代間交流広場)の企画運営を行うようにした。基本的に

は、授業の前半で講義を行い、後半はそれをふまえて広場開催のための話し合いや作業などを行う形をとった。また、夏期休暇中の課題として、「あそぼうかい」以外の子育て広場に参加することを

課し、異なる広場について理解を深めるようにした。2010年度の15回の授業内容について、広場の企画運営に関する内容を中心に、以下の表に概要をまとめる。

表 2010 年度の授業内容と経過

回	日	テーマ	授業内容	備考
1	4月10日	子育て広場とは何か（瀧口）	前年度の実践をDVDで紹介しながら説明。学生GP委員会の代表および「あそぼうかい」の担当者も参加してあいさつすると同時に、2週間後に予定されている学生GP主催の広場の内容について紹介。	希望別に実施コーナーに分かれて、当日どのように参加するのかを定める。次の授業は地域の親子及び高齢者を呼んでの「合同広場」で、子育て広場特論を受講する学生は実践的な参加が授業の一環として求められることを伝える。
2	4月24日	学生GP広場への参加（全員）	13時から受付で、13時30分より広場がはじまり、15時30分まで授業時間を越えての参加。	片付けや反省会で終了は17時近くなり、一人一人が感想と反省を書いて後日提出することとした。
3	5月8日	子育て広場の企画・参加で考慮すべきこと（佐久間）	講義（60分）。話し合い：合同広場の反省と総リーダーと副リーダーの選出。	今回は二人とも男子学生（保育科）が立候補して承認された。7月に予定されている合同広場を主体的に準備することになる。
4	5月22日	子育て支援と世代間交流（草野）	講義（60分）。話し合い：総リーダーの指揮で7月の合同広場にむけてテーマ決定と実施コーナーの企画案の検討。	今年度は受講者35人ということで前年に比べて少ないこともあって、話し合いはスムーズにすむ。
5	5月29日	ひろばから学ぶもの・実施上の視点（小松）	講義（45分）。話し合い：前回提示されたコーナーの企画案が承認される。コーナーごとでの具体的な企画案の作成へと入る。	GP学生委員会の学生が各グループに入り、具体化のためのアドバイスを行う。企画書の提出を受け、担当教員は企画書へのコメントを書いて、各コーナーリーダーに返却。
6	6月19日	子どもの発達と想像力について（佐久間）	講義（30分）。話し合い：7月3日の合同広場に向けて各コーナーからの説明と当日の動きについての確認。	合同広場前の授業としてはこの日が最後になる。各コーナーの準備、チラシやポスターの作成、その配布（公民館や幼稚園、保育園などへの配布及び地域への全戸配布）などをその間に行なう。
7	7月2日	第1回合同ひろば（全員）	午前中から準備をはじめ、遊具の設置などを行なう。13時前に子育て広場特論及びGP学生委員会のメンバー、教員の打ち合わせを行い、朝鮮大学校の学生及び教員も参加。	13時を過ぎると親子が集まり始め、各コーナーに参加する。15時を目安におわりの集いを開催し、30分程度で手遊びや絵本の読み聞かせなどを行なう。参加者は親子30組と高齢者12人。
8	7月10日	第1回ひろばのまとめ（小松・瀧口）	前週の合同広場の反省を各コーナーごとに、そして全体で実施。次の11月の合同広場にむけて、総リーダー及びサブリーダーの選出。	場で気付いたことなどがたくさん出される。夏休み中に7つの広場のどれかに参加することを課題として希望を調整する。
9	9月25日	ことばの発達と子育て（瀧口）	初めに学生GPより連絡。講義（30分）。話し合い：リーダー、サブリーダーの進行でテーマとコーナーの決定。	11月を意識して暖かいテーマと製作や読み聞かせのコーナー、朝鮮大学校コーナー作成についても話し合いが行なわれる。
10	10月16日	育児不安と子育て支援（小松）	講義（45分）。話し合い：リーダーの進行でコーナーごとに企画を考え、目標や内容を具体的に議論。	朝鮮大学校との連絡が取れて、コーナーを1つ持つ方向で調整することになる。翌週の学園祭についても話し合う。
11	11月13日	子育て支援制度を考える（佐久間）	講義（30分）。話し合い：各コーナーでの話し合いや製作の時間。	前期のひろばと違い一人一人が目標を持って当日動くことが提起され、目的についても再確認された。

回	日	テーマ	授業内容	備考
12	11月20日	第2回合同ひろば(全員)	午前中から準備をはじめ、12時過ぎに全体の打ち合わせを行い、朝鮮大学校もコーナー担当として参加。	25組の親子と高齢者8人が参加し、アンケート結果によって、ひろばが地域の人々に必要とされ、交流が広がったことがわかる。
13	11月27日	地域コミュニティ作りへの視点(小松・瀧口)	前回のひろばについてリーダー、サブリーダーを中心に総括。各担当コーナーごとに反省会をもってまとめる。	まとめとしてひろばの成果を踏まえて、小松・瀧口より地域の人々とどのように交流を進めるのかその視点について提起する。シンポジウムに向けての発表内容も確認。
14	12月18日	多文化社会と子ども(全員)	子育てひろばシンポジウムとして、特論の授業と各ひろばの発表、地域の方々を招いてのシンポジウムを聞き、レポートを書く。	シンポジウムの感想を踏まえて1年間の学びについて次回までに整理しておくように伝える。
15	1月15日	1年間のまとめ(全員)	「子育てひろば特論アンケート」の記入と担当者からのまとめを行なう。学生GP委員会からも発言を求める。	授業の評価方法について再度連絡し、今まで書いてきたレポートを確認する。

3. 研究の方法

1年間授業に参加した学生29名全員からアンケートの回答を得た。アンケートの質問項目は、1年間の授業を振り返って率直な感想、授業を通して学んだこと、次年度受講生に対する運営内容や受講者へのアドバイス、GP学生委員会や指導員の方々への意見、7つの広場への参加の有無と気づいた点、子育て広場特論の授業を通して自分が成長したと感じること、朝鮮大学との交流についての意見、今後「子育て広場GP」に参加したいかである。これらは基本的に自由記述式での回答である。以下では学生の学びや成長について検討するために、授業を通して学んだこと、自分が成長したと感じることを取り上げ、学生が記述した内容を整理する。さらに朝鮮大学との交流についての意見から、多文化共生の視点に関わる学びについても述べる。

4. 学生の声と学びの内容 —授業アンケート調査より—

(1) 授業を通して学んだこと

授業は、講義と合同広場の開催のための時間及び実際のひろばの実施に分かれる。記述内容には、講義について学んだことと、ひろばを通して学んだことが含まれていたため、まずはそれぞれについて整理して述べ、そして講義と実践が結びついた学びについてまとめる。

① 講義を通して学んだこと(以下()内は言及人数)

学生の記述を、授業内容などを参考に分類した。言及人数の多かったものとして、子育て支援の意味や現状について(11名)、親について(7名)、世代間交流について(7名)、地域支援(6名)に関する記述がみられた。

それぞれの具体的な内容としては、子育て支援に関しては、「現代の子育ての現状について知ることができた」という回答が6名に見られた。また「なぜ子育て支援が必要なのか」「何が今必要なのか」という、子育て支援の意味について学んだという記述も見られ、さらに「私たちは何をしなければならぬのかを学ぶことができた」「学んだことをきっかけに私の住んでいる市や親戚が住んでいる市の子育て支援について調べてみようと思った」というように、自分自身が子育て支援に参加しているという意識を強くもって授業に臨んでいる様子うかがえた。

親については、「親の育児不安や悩みを知った」や「親との関わり方」を学んだという記述が見られた。さらに親にとっての広場の意味や、親支援の必要性について学んだという記述もあった。

世代間交流は、本授業の特徴の一つでもあり、子育て広場においては1つの柱として「世代間交流の広場」が置かれ、地域の高齢者と学生や子ども達が交流することを通じて相互の理解と発達を

目指してきた。世代間交流というキーワードが多く記述されたことは、学生にとって明確な学びの一つとして位置づけられていると考えられる。また地域支援という記述が見られたことは、子育て支援が地域支援でもあるという理解がなされているといえるだろう。

②ひろばを通して学んだこと

参加者(子ども, 親, 高齢者など)との関わり(10名), ひろばを運営することの大変さや難しさ(6名), 安全面や配慮(5名), 子どもたちの興味や遊び(4名)といった記述が見られた。参加者(子ども, 親, 高齢者など)との関わりについては, 関わり方を学んだだけではなく, 保護者と話すことで「育児の大変さ」を知ったり, 「学生との交流を楽しみにしてくれること」を知ったというように, 参加者との実際の関わりについての記述も見られた。

また学生の記述の中には, 「授業を受けているだけではわからないことを知った」「机上だけは学べないことがいっぱいあった」「身をもって体験できた」「今までとは違った見方」「違う視点で見ることができた」という記述があり, 学生が実践を通して学びが広がったと理解していることがうかがえた。

③講義と実践が結びついた学び

本授業の特徴である講義+実践という授業形式がもたらす学びについては, A~Cに示すように, 学生の記述の中に具体的に表現されていた。講義で知ったことが実践の場でのかわりを通して事実として理解されていく様子(記述A)や, 講義で得た知識から自分が何をできるかを考える(記述B), さらに参加者の立場に立って考えることの大切さを実感していること(記述C)がうかがえた。

A: 7月, 11月のあそぼうかいで実際にお母さんにお話を聞いて, 講義では知るだけだった

悩みなども, 本当のことだという事実が変わり, それを周りのお母さんたちが共感しあって話しが盛り上がっているのを見て, 少しは解消できているのかなと自分もその場について学んだことを実践できているなど思いました。

B: 子どもたちにどのような広場を展開したら, 楽しかったと思える場にできるか, 考えることができました。

C: 子育て支援についての講義では, 子育て支援の現状を学び, 私たちが広場でどのように関わり支援ができるかを考えさせられました。広場では初対面の親子と触れ合うことで, 一人一人どういうことを感じて広場に参加しているのかや, 何を望んでいるのかが聞けて, その言葉を頭に入れて参加者が楽しめる広場を作ることができました。相手(子ども, 親, お年寄り)の気持ちを考えながら作業することが大切だと感じました。

(2) 自らの成長について

アンケート項目の「子育て広場特論に参加して成長したと感じるか」という設問に対し, 28名の学生が「大いに感じる」「やや感じる」と答え, 「あまり感じない」と答えたのは1名だけである。以下では「どんな点で成長したと思うか」という問いに対しての自由記述を, 本授業で目的に挙げたコミュニケーション力, 表現力, 考える力や判断力, 総括する力の習得という点から整理して述べる。

①コミュニケーション力がついたことを実感

広場当日は参加者と実際に関わることが求められる。参加者との関わりも本授業の重要な学びのひとつであり, 幅広い世代とのコミュニケーション能力を習得することが, 本授業の目的に掲げられている。実際に, 参加者と積極的に関わることの大切さに気づき, 実践した(話しかけてみた)という内容の記述が10名に見られた(例: 記述

D)。さらに当日だけでなく、その準備過程での学生同士関わりを通して、成長したという記述も同数（10名）見られた（例：記述E、F）。学生自身が企画運営していくためには、学生同士で意見を出し合い、話し合いを重ねる必要がある。その準備や振り返りの過程の中で、自分が他人とのコミュニケーション能力を高めることができたという記述が多くみられたのである。また協力することと同時に、人前で話をしたり、全体の中で自分の意見を言えるようになったという内容も10名が記述していた（例：記述E、F）。これらより、本授業を通じてコミュニケーション力や表現力の高まったことを、学生が自らの成長として理解していることが推測される。

D：ボランティアや実習などでは、保護者の方と話す機会があまりなく、あったとしても自分から話すことができないということが多いのですが、特論の授業を通して広場に参加する方は、子どもだけでなく保護者や高齢者の方もいらっしゃるの、小さなこと、身近なことからで良いから積極的に話しかけてみることが大事と学び、以前より緊張せずに話しかけることができたと思います。

E：話し合いをする時など、今までは静かに聞いていたりするだけだったが、特論を受講して、自分の意見を言えるようになり、また仲間と協力し合うことの大切さや面白さなどを改めて感じることができました。

F：初めは広場をやるといっても他人任せな感じでしたが、自分で考え、意見を出し合う、協力して準備することなどの大切さが分かり、以前よりも出来るようになった気がします。

②考える力、判断力、そして予測力の成長

この1年の授業を通して、学生たちは自分達で企画、準備、実行することによって、広場を作り上げる経験を積んできた。考える力や判断力に関しては、物事を考える際に、講義や広場での経

験を生かして、相手の立場に立って考えるようになったこと（記述G、H）や、「見通しを持った準備ができるようになった」こと（記述I）が記述されていた。これらの学生たちは、講義で得た知識をもとに、自分自身の視点から離れて、多角的な視点から活動を見通す力を身につけたと理解していると思われる。

G：子どもの目線になって物事を考えるようになった。子どもだけでなく子ども以外の人のことも考えるようになった。

H：安全面や安心して過ごすことのできる環境作りなどについて深く考えることができ、常に子どもの立場に立って考えることができるようになりました。また、保護者や子ども達との関わりなど、実践の場があるからこそ、様々なことを学ぶことができました。

I：どこに注意して広場運営をすれば参加者が安全に楽しめるか考えられるようになった。子どものことだけでなくむしろ大人の方に深く関わろうという思いがではじめた。見通しを持った準備ができるようになった。

③総括する力

リーダーや副リーダーになり中心的に広場を進めてきた学生からは、総括する力に関わるような記述が見られ、責任感やまとめる力についても言及していた（記述J、K）。

J：自分の中で副リーダーをやらせてもらったことが大きな成長につながったと思います。責任感だったり、みんなをまとめることだったり、色々なことで大きくなったと感じます。

K：様々な人と協力するとか自分の意見を言うことを学びました。そして副リーダーとしてやった時には、みんなの前で何回か話させてもらった時には、だんだんとなれてる自分がいました。これも成長だと思っています。

(3) 多文化共生の視点を持つ

本学が実施する子育て広場の「あそぼうかい」や「世代間交流ひろば」では隣接する朝鮮大学校との交流を大切にしており、2回の合同広場には、朝鮮大学校の保育科の学生も参加している。そこで朝鮮大学校との交流についての意見を記述してもらったところ、初めての関わりではあったものの、大半がプラスに捉えており、多文化共生という視点を実践的に学んでいることが示唆された。

L：国や文化が違ってても、同じ保育を学ぶ学生として交流できてよかったと思います。連絡をとったりは大変だと思いますが、これからも交流を続けてほしいと思いました。朝鮮大学の先生にも色々な意見をもらったりできたので良かったと思います。

M：国籍で人を判断していた自分のイメージが変わった。イメージが良くなったわけではないが、置かれている状況を見聞きして、彼らも同じ人間ということに気づいた。

N：11月の広場では朝鮮大学校の方にエプロンシアターをしていただきました。初めて聞く朝鮮語の歌とともに楽しめました。とてもよかったですと思います。今度は朝鮮大学に行ってみたいと思いました。

5. 考察とまとめ

(1) 学生の「学び」とは何か

4において学生の声を分類し、学生の学びや成長について分析してきたが、29名の受講生を対象とした、1回のみの調査であるため、この結果の妥当性や一般化可能性については限界があると言わざるを得ない。しかし学生の記述には、この授業だからこそ実感できた具体性を持った学びが多数述べられていた。そしてコミュニケーション力や相手の立場に立って物事を考え、予測する力が養われたことを読み取ることができた。以下ではなぜ「子育て広場特論」の授業がこうした学び

につながったのか、そしてこの学びは今後学生にどのように活かされるのかを考察していきたい。

①「参画」を柱にしたコミュニケーション力

学生たちが述べる自らの成長として、仲間との協力の大切さを知り、全体場で自分の意見を言えるようになったという記述が多く見られた。最初は遠慮がちで、他人任せだった学生も、広場を作り上げる過程の中で、自ら積極的に参加し、意見を交換することの重要性に気づいていったのである。特論の広場は、学生主体の広場であり、学生がアイディアを出さなければ、企画は動いていかない。一方で自分の意見が受け入れられれば、それがすぐに実現できるのも、この広場のよさである。学生同士がお互いの理解をぶつけ合ってテーマの設定やコーナー企画を話し合い、共同して準備するという過程を踏んで、実践の場で学びの共有がなされているのである。この過程、つまりは本授業の特徴である講義と話し合いと実践を含む一連の過程が、コミュニケーションの重要性へ気づきや、実際に人と関わる力を高める効果を持つといえるのではないだろうか。それが朝鮮大学校との交流にも現れており、学生の多くが交流の意義を理解し、多文化共生という視点を意識することができているのではないだろうか。

②将来の学びへのきっかけとして

本学に入学してくる学生は、それぞれの学科において卒業後の進路について目的意識を持って入学してくる学生が他大学に比して多いと思われる。とりわけ「子育て広場特論」受講生の大半が短期大学の保育科であり、2年後には保育園や幼稚園、あるいは児童養護施設などに就職するものがほとんどである。その彼女たち、彼らにとっても、自ら考えて、判断し、しかも表現（行動）していくことは初めての体験であることが多い。初めての経験を前にして、授業で学んだことを踏まえて、参加する子どもの年齢を想定し、年齢にふさわしい遊びを準備し、実際に参加した子ども達

の遊び方を通して、自分が想定したことの是非を確認していく。また実践を繰り返すことで、参加者の視点に立って考えることの大切さに気づいていくと思われる。

授業に参加した1年間で、多くの気づきそして学びが積み重ねられていくが、それらは人と関わる仕事に就く学生たちの将来にも活かされていくのではないだろうか。以下の学生の記述（1年間で振り返っての感想に対する記述O）から、本授業での経験や学びが、将来への自分につながっていることを読み取ることができるだろう。このような観点からも、本授業の意義を捉えることができるのではないだろうか。

O：子育て広場特論を受講しなければ多分私は子育て支援について考えたりするきっかけはなかったらと感じています。子育て支援は大抵だとわかっていても、実際どのように支援するのか、その支援することが保護者にとってどのような支えになるのかまで分からなかったと思います。そのようなことに自分に関わることができたことは、保育者を目指す私にとって、良い経験になりました。

③「顔の見える」地域支援へ

ひろばを通して学んだことでは、参加者（子ども、親、高齢者など）との関わりについてが、最も言及数が多かった。それらには、子ども達や保護者、そして高齢者たちが喜んでくれたという実体験に伴う気持ちや実感も含まれていた。つまりこれらの学びの背景には、具体的な人との関わりでの経験があるのである。

本学では広場を継続的に開催しているため、繰り返し参加している上級生は、地域の子どもや保護者、あるいは高齢者などの参加者との間に「顔の見える」人間関係、「名前の言える」関係ができあがっている。本授業の受講生にとって、子育て広場に参加している地域の人々との関係は、まだまだ「顔が見えはじめた」関係というレベルで

あろう。しかしこの授業は、子育て支援に自ら取り組みきっかけとなっており、「顔の見える」地域支援にむけての関係作りのスタートとして意味づけることができるかもしれない。実際にこの授業の後、29人のうち10人が何らかの形で学生GPの広場活動に参加している。本授業の履修を終えることが子育て支援への興味関心の終わりにならないように、学生がその後も関心を持ち続け、活動をし続けられる環境作りを、教員は支援していく必要があるだろう。

<引用文献>

- ・池田昭子 2007 保育科における子育て支援の必要性における一考察 関西女子短期大学紀要 16, 115-125
- ・馬見塚珠生・竹之下典祥 2009 学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的变化とひろば自体の変化に関する考察（その1） 京都文教短期大学研究紀要 48, 30-43
- ・馬見塚珠生・竹之下典祥 2010 学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的变化とひろば自体の変化に関する考察（その2） 京都文教短期大学研究紀要 49, 32-49
- ・土居隆子 2011 子育て支援力を育む授業内容の検討～学生の意識変容から～ 活水論文集・健康生活学部編 54, 63-80
- ・瀧口優・瀧口美智代 2006 学生が生きる子育て支援 白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター年報 NO.11
- ・小松歩・佐久間路子・瀧口優・草野篤子・金田利子・佐々加代子 2008 子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育—学生の変化と教育効果の評価方法について 日本保育学会第61回大会発表論文集
- ・瀧口優・金田利子 2009 白梅子育て広場における学生の主体的な参画という視点からの考察 日本保育学会第62回大会発表論文集
- ・瀧口優 2010 白梅子育て広場と学生の地域意識 地域と子ども学第3号 白梅学園